

タイトル	質疑応答
著者	
引用	北海学園大学大学院文学研究科(20): 178-199
発行日	2023-12-25

質疑応答

司会（大森一輝・北海学園大学人文学部）…それでは、ここから質疑応答の時間としたいと思います。
それに先立ちまして、藤原さんに、小松さんと郡司さんのご報告に対する簡単なコメントをお願いしたいと思います。特に郡司さんについては、時間の関係で端折らざるを得なかった部分についてもコメントや質問をしていただければ、それに答える形で郡司さんから補足してもらえるのではないかと思います。

藤原…小松さんのお話は、私の研究テーマとも深く関わっています。歴史学は絶望の学問であり、いかにきつちりと絶望するかが歴史学の一つの課題だとするならば、小松さんの人類学的なご関心は可能性の学問として拝聴しました。中でもはつとさせられたのは、人々のいい加減さ、例えば焼畑の木が伐り切れていないとか、雑草が抜ききれていないとか、日本語ではマイナスワードで表現してしまうところを、そのように思う私たちの考え方自体が偏っていて、私たちは考え方をいつの間に固めてしまったんだろうかと反省させられるものでした。

今日深く考えたくなる言葉として、手を抜くという技術がありました。これは、同じ人類学者の松嶋健さんという方が『プシコ ナウティカ』というイタリア精神医学のテーマの本の中で書いたことと重なります。イタリアではよく物が壊れ、その壊れたものを積極的にいとおしむ人た

ちが多い。あえてシステムが動かないようにすることで、人間関係をつないでいるのではないかとおっしゃっていました。同様に手を抜くという技術は、私たちが忘れている関係性をつないでいるように見えます。日本でも豊作と満作という言葉があるように、昔は手を抜く技術やジェネラリストとして生きるということがあったのではないかと感じました。

小松さんがアフリカの歴史を学んだり、歴史学の本を読んで感じたりしておられることと、小松さんの研究のつながりについてお話しただければ、今日のテーマに関わってくると思います。例えばコンゴはベルギーの植民地であって、ある意味世界植民地主義の最悪のど真ん中の場所でしたが、そんな中で小松さんがバナナやカカオを取る人たちの中に私たちが忘れている可能性のようなものを見ているという、その歴史と人類学について思うところを教えてください。

それから郡司さんの発表のテーマは、私なりに響くところがありました。近代家族が崩壊プロセスにある認識を持ちながら、私たち自身が「ディグニティー」、生きる尊厳をどこに持っているかを歴史的に見ていくことは、現代に突きつけられている課題です。それを人口や家族の形態、お酒の話など、具体的などころから見ていきましようという歴史学のいざないであると思いました。

もう一つ、東北地方の農村では自分たちでどぶろくを作っているから、おそらく統計に計上されていないだろうという話をされていました。私自身、実は東北地方のどぶろくについて論文を書いたことがあります。伊藤永之介の小説にもどぶろくを作る女性が描かれており、どぶろくと日本近代というテーマも実はすごく重要だと思いました。

ここから質問です。後半時間の関係で省かれたところを私は聞きたいと思いました。今日のメッセージが、郡司さんは「私」や具体的な名詞で歴史を語れよという一つのいざないであったと思うし、私自身もはつとすることが多かった。その中で資料の「旭川独立速射砲第22大隊塚本健一 一等兵の日記と川上上等兵の回想」についてご紹介いただき、郡司さんはどう考えているのかを説明いただきたいと思いました。というのは、資料の次のページの石原吉郎『望郷と海』、ここに「人間とは加害から生まれるものだ、被害者の中から生まれるのではなく、人間は常に加害者の中から生まれる」という立場を取られています。その意味で、「旭川独立速射砲」回想」は厳しい目線を持っている資料だと思います。『皇軍とアイヌ兵士』の本によると、日本兵は住民を壕から追い出したり、乳幼児を殺害したり、あるいは食料や水を市民から奪っていった。一方で、アイヌ兵と行動を共にした家族らは、幼い子どもを優先しつつ、水や食糧を分かち合い続けたというところを、郡司さんはこだわっていらつしやるように思いました。私たちはとても弱い人間なので、今はどんなにヒューマニスティックなことを人文学に基づいて話したとしても、いざ戦争になって子どもの前においしい食べ物があつたら、私はそれを奪わずにいられるのだろうか、と郡司さんは突きつけていらつしやつたように思います。ですから、資料から何を仰りたかつたのかをぜひ聞きたいと思います。

小松…アフリカは歴史そのものも「いい加減」です。無文字社会なので、王朝の歴史であつてもオラルで語り継がれる。そうすると、出来事が組み替えられて過去の歴史は現在につながるように

作り変えられるのが普通です。今、日本の歴史学では、書かれていないものは変えられるので怪しいと言われたりしますが、アフリカでは「歴史は今のためにある」と言われ、歴史自体が変わっていくのが当たり前だということではないかと思います。そのアフリカの歴史については、川田順造さんが『無文字社会の歴史』という本を書いています。歴史がいつの誰のためにあり、それがどう変わるべきかわからないべきか、というのはアフリカにいるとしばしば考えます。

郡司

…お尋ねの沖縄戦の資料は、かなり問題のある資料で編者の手が入っている可能性を捨てきれません。そこでご指摘の部分を除き、広く承認されていたり、裏づけがとれたりする事実を抽出した次第です。

その上で、まず知っていただきたいのは、日清戦争後の1889年、北海道全道に徴兵制が施行されます。そのときからアイヌ兵が召集されています。同時に沖縄県にも徴兵制が施行されますが、沖縄出身兵は郷土部隊を持たず、九州の各部隊に分散配置されました。アイヌ兵も和人数隊に分散配置されています。彼らは常に和人に対して少数になるように部隊に編成され、とくに言葉の問題で差別されます。これは、アジア太平洋戦争期の朝鮮・台湾兵と同じです。要するに信用していない。

そういった前提のもとで、「幼い子どもを優先しつつ」と書いたのは、アイヌ兵と彼が沖縄で逃避行を共にした母親と幼い兄妹の事例についてです。母親は、兄の方に「あなたはニーニーなんだから我慢なさい」と、別の家族の3歳の子どもに食べ物を分け与えます。ニーニーだってま

だ小学校三年生ですから8・9歳なのに。年寄りも食糧がなくなってくると、子どもたちのために食べ物を口にしなければなりません。アイヌ兵はこの家族らと食糧を分かち合い、携帯食糧として最後に残った乾パンを妹に与えています。なぜかと考えると、一つは沖縄の人たちに共感を抱いていた。まずは入れ墨です。自分のおばあちゃんも入れ墨をしていて、かつてそのおばあちゃんに小学校の授業参観に来てくれると言った自責の念もあって、関係が深くなっています。それから琉球語への共感。つまりアイヌ兵は、沖縄の人々と接するなかで自分の過去を相対化し、民族の自覚に目覚めていった。

もともと、このアイヌ兵や件の母親は、和人に対しても同じ行動をとったでしょう。では逆はどうでしょうか。それを例証しているのがまさに沖縄戦です。また、レジユメにあるとおり、フィリピン・ホロ島では子どもが食人の対象になり、本土決戦準備のために近衛聯隊が展開していた九十九里浜では学童の弁当が奪われています。

それからもう一つ、人は生き延びる可能性がなくても食を欲する。むしろ生き延びる可能性がないからこそ、他人から食糧を奪えるのではないか。どういうことかという、1944年1月、アウシュヴィッツがソ連軍に解放される直前にSS（ナチス親衛隊）が去って、生き延びる可能性が出てきた時に、人間的な感情が蘇る。それは羞恥だったのではないか。生き残ったことへの羞恥、貧しく無力であることへの羞恥、現に生きていると自覚するがゆえに生まれた羞恥です。だから、他者とともに生きていることを知るといえるか、病気で身動きできない自分たちのために、鋳物の重いストープを運んでくれたブリーモ・レーヴィーらに対しても、感謝の印としてなけ

しのパンを分かつことができた。それが民族や国境を超えた共同性をレーヴィーたちに付与したのではないだろうか。つまり、作田啓一が『恥の文化再考』で未来に期待した人間の結びつきは、実はレーヴィーたちにもあてはまる。羞恥は原初の人間の姿だからです。

藤原先生は本日、「縁食」という試みを教えてください、家族とは異なる、人と人との新たな結びつきを創っていくべきだと仰っていました、共同性を否定されているわけではない。「縁食」とは、「共食」、食の「共有」ではなくて、対等な資格でものごとにかかわるという意味で、食や時間の「共同」なのではないか、と私なりに考えましたが、羞恥もそのような結びつきの核になると考えています。

石原の言葉は、告発を峻拒することで、「さいごに一つ残された〈空席〉」、すなわち裁判の被告席に連なるべき己を告発した鹿野武一という人物を念頭においたものです。ラーゲリのような極限状況では、被害者は同時に加害者たることを免れえない。駆使する者の最大の罪は、人と人をそのような関係におくことで人間性を剥奪しようとした点にあると思っています。

しかし、「外的な力」に駆使されたとしても、罪自体は消えない。被害者として「外部の力」を告発しても、自分の罪は拭えない。むしろ不問に付すことになりかねない。だから、自分が加害者であることを承認し、その罪を問い続けることで人間として再生するしかない。「〈人間〉はつねに加害者のなかから生まれる」とは、そのような意味でしょう。カール・ヤスパースの『責罪論』も、「道徳上の罪」や「形而上的な罪」をとおして、そのことをドイツ国民に問うたのではないだろうか。

井上ひさしの「主語を探して隠れるか
自分が主語かそれ次第」には、立憲君主
という「主語を探して隠れ」、開戦責任を
逃れようとした昭和天皇が念頭にあります
が、私は、国民も「日本軍」に隠れ、ある
いは被害者としてこれを告発することで、
「自分」が主語だった戦争の加害を問い質
さなかつたと思っています。

司会…ありがとうございます。フロアからも

質問がある方は挙手をいただきたいと思
います。

質問者1…藤原先生に質問です。先生は保育園
等での講演が増えていると仰いましたが、
行政や民間の営利企業、農業生産に携わっ
ている方の講演依頼がありましたら、どの
ような場所で講演され、聞いた方々がどの



ような反応をされたのか、その後行動にどのような変化があったのかなど、ぜひ伺いしたいと思います。

藤原…民間企業からもあります。フードテックの関係の会社からもありました。私が批判的だと知った上で呼んでいただいて、議論しようということだったと思います。私が驚いたのは、批判している企業と議論する中で、先方も縁食という考え方に共感していて、食べることが持つポテンシャルについて考えているということとは同じである。そのお手伝いをする過程で、新しいフードテクノロジーがあるのではないかと、目的・目標を共有できるところがあるのです。ですから、最初からファイティングモードでいくと意見が合わず、最終的にどうしても折り合えないところが出てきたとしても、それも込みで議論していくことができたらと思っています。

農家さんも多いですね。一番面白かったのは、『トラクターの世界史』という本を中公新書で出した後に、北海道はトラクターの聖地でして、「十勝オールドトラクターの会」という会に呼んでいただきました。この会は古くからあるトラクターを守りながら展示をし、かつそれを歴史として語り継いでいくという、すごい人々の集まりで、その方たちに本の批評をいただくという会でした。

私は一人の歴史研究者として、そういう方たちとお話をしたことによって、知らない情報をたくさん得られたのも確かですし、生産者さんなので実際に食べ物を作っている。そのような方からはしばしば、あなたの考え方には共感できるけれど、具体的にどうしたらいいのかと質問があ

ります。「あなたの言っていることは頭ではわかるけど、生きていくためにはこうせざるを得ないです」ということもあります。それは私の発表の仕方が悪いのではなくて、恐らくその議論に耐えていくしかない。お互いに問いを投げて、現実と学問で何度もやりとりしながら、毎回教えていただいています。このような形で発表させていただくのも毎回試行錯誤で、いかに理想論にならないかを考えています。郡司さんがおっしゃったように「私」という主語を入れることも一つのヒントになりますけれども、そういう悩みを抱えながら、生産者や民間企業の方と対話を続けている状況です。

質問者1…ありがとうございます。関連して、生産者の方の作った食べ物を捨てざるを得ない、加工したお弁当などを大量に廃棄しなければならないなど、食べ物を捨てることについてデイス・カッションなどはあるのでしょうか。

藤原…ものすごくあります。私がフードロスの話をすると、そういうお話が聞こえてきます。それは今の経済、状況ではそうせざるを得ない。私はそれを責めるわけにはいかない。そのようなときに私が話すのは、例えばこども食堂では、そういった捨てざるを得ない食べ物を欲しているところがあつて、そこを農家さんでつながりながら、売り物にならない野菜などをこども食堂に持っていけば循環できるという例もあります。本当に小さな事例ですけどもそういう話をする、そこから話は盛り上がっていきます。

たくさんものを捨てざるを得ないということは、いろいろなところから聞きますし、大学でも学生に聞くと6割か7割がフードロスについて話してほしいと言う。「なぜ？」と聞くと、学生はアルバイトをしていて、ファミリーレストランやコンビニなどで凄まじい量のフードロスが出るので苦しんでいる。その苦しみの話を農家さんのところであると、解決はしませんけれども、何か共感するものは返ってくる。その媒介役として質問を受けたり、お話をしたり、ということもさせてもらっています。

質問者2…小松先生が、インドネシアの事例で食べられないようなバナナも面白いから育てている方がいるお話をされていました。向こうの農家さんの考え方は、日本の農家さんどどのように違うのかお聞きしたいです。

小松…その話をしたインドネシア・スラウェシのマンダールの人びとの地域は、米があまり作れないくらい山がちな地域で、漁業と農業を組み合わせてやっています。バナナも売ることはありませんが、自分たちで食べたり分けたりすることもある。食べることを売ることが地続きな社会です。もう一つ、ガーナはかなりバナナの商品化が進んでいる場所ですが、ある畑に行ったら実が一本しかないバナナがあつて、かなり不思議なものなのですが、なぜこんなものを植えているのかと聞いたら、買ってきた苗を育てたらこうなったのだ、と。邪魔だから切ってしまう方がいいようなものだけれど、何代も更新して生えている。たくさんあるに越したことはないけれど、こういう

ものもあってもいいじゃないかと、どこか自虐的に、でもそれを残しているというのが印象的でした。いろいろなものを分けなくてやっていく農業との関わり方もあると思っています。

質問者3（テレングト・アイトル・北海学園大学文学部）…新人文主義という概念のもとにおいて、

3人の方は非常に面白く最先端のフロンティアを紹介していただき、かなり多くのことを考えることができました。この「食と農の人文学」は、文学の大元から問いかけようとしており、3人の方がいずれもアリストテレス的な科学性発想で進めており、ずっと近代化を進む中でどのような問題が起っているかを考えていらつしやるようです。その中で小松先生の考えは、ある集団、あるグループが人間と自然との対話をしており、その対話の結果はどうなるかを客観的に見ようという研究をされています。

そして私が聞きたいのは、藤原先生が仰ったように、近代化が進んでいく中で、人間と自然を同一化することを考えられているというようですが、同一化はプラトンの『ティマイオス』の対話で言うと、人間それ自身がエネルギーを消耗していくから、エネルギー自体は限界があるものとして考えるならば、ポジティブに考えられ、我々の生命はアリストテレスの科学への信仰ですつと進んでいけば、ずっとポジティブ的なものを考えるだけになりますね。論理的には、生命それ自体が発展することを、その先ずっと種が崩壊するまで維持しなければならぬということになります。その反対を考えると、文学、少なくともプラトンのなソクラテスの考えで言うと、命の営みはどこまで利益を得るかということ、我々自身のために議論をしなければならない。

これは永遠の課題だということを示唆しています。

そういう課題を念頭においた場合、藤原先生の考え方のいくつかの問題は、いずれも社会的な問題であり、ファストフードを取り上げたエリック・シュローサー、この人はジャーナリストですね。ジャーナリズムはどうしても上辺だけにとどまり、現象だけを論じて、それ以上は見えないという傾向があるのではないかと思います。カトリック・マルサルの経済学の本は、女性不在の問題を取り上げたもので、同じジャンルのものだと思います。ジャーナリズムの論説は確かに有効です。社会現象をもよく取り上げて表現しています。それが人間の根本問題として我々人間の存在、ヒューマン・ビーイングに対してどれくらい有効かは問題として気になります。

そして、私が非常に高く関心を持っているのは、この報告の最後の村の縁側での会話を行了なつたことです。それは触媒としての役割を果たしているようです。これは素晴らしいことで、古典的な人類学にも直接つながるのですけれども、人間は食べるだけでなく、語ること自体も重要であり、文学とは、起源から語ることであり、そこでカタルシス（精神浄化作用）を体感できるのです。それによって人間がより豊かになっていくのです。郡司先生のところで強調された、パラドックスの問題ですけれども、人間は一旦、極限に追い詰められると、倫理的には欠如するという問題につながっていきます。本質的に人間がどこまで倫理をもつて論じられるかは、私も常に疑問を持っています。近代化の中では、これは解決不能な問題です。しかし、人文学の大元に戻って考えてみると、ポジティブとかネガティブではなくて、議論していくしかありません。それは常に真実へのプロセスだと思います。感想を交えて、藤原先生にジャーナリズムの問題を

伺いたいです。

藤原…私は最近『植物考』という本を書きまして、植物とは何かと考えたときに、思い浮かべたのがアリストテレスでした。まさに人文とか理系とか関係なく、植物とは何かという一点において古代の哲学者たちが議論していた時代が、実は今こそ求められているはずなのに、いつの間にか線を引いてしまつて、私のような文学系の者が植物とは何かを語るとは何事か、という時代になっていることが、すごく残念に思います。

なおかつアリストテレスが西洋思想の正統だと言われているけれども、一旦は潰えたうえで、イスラムを経由してもう一度重視されているという史実を考えるならば、古代のプラトン・アリストテレスの時代のさまざまな議論を今日、喚起していただいたことは、私にとって光栄なことですし、私自身もそのようにありたいと思います。

そこで、一つ目のヒューマン・ビーイングとジャーナリズムの件ですが、確におっしゃる通りで私が大学で歴史学の訓練を受けているときは、「ジャーナリスティックにはなるな」と教えられていました。それはつまり、現在の問題に引きずられ、人間の本質を見失う可能性があるというのが、先生の警告だったのです。今のご指摘は、まさにそこだと思います。

ただ、エリック・シュローサーは食の歴史学者や人類学者に匹敵する、あるいはそれ以上の「調査」をしております、私は一人の学問の担い手として、その調査を間違いない信頼できると思つて彼の本を取り上げております。彼の『核は暴走する』という本も日本語で読むことができまし



て、この本の脚注を見るだけでもあらゆる歴史学者は彼に頭を下げるだろうというくらい、文献の読み方とオーラルヒストリーの精緻さは驚くべきところがあり、その調査に基づいた人間の洞察があります。

『核は暴走する』という本は、1980年代初頭、アメリカでタイタン2という核兵器がある基地で、修理中に誤って物を落として、それが燃料に刺さって間違って核弾頭を積んだまま飛んでしまい、飛ぶ前に一体誰が何をしたかを克明に描いた本です。偉い人から順に逃げてゆき、最後まで残った技術者が何とかするのだけど、その何人かはいつしか亡くなってしまうという、チェルノブイリと同じような問題が見えてきま

す。そういった人間存在のずるさも含めて、彼が掘り下げられたのは、古典的な人文学の素養と、それ以上に実態をしつかりと見て、議論を止めない、結論が出るかどうかはわからないけれども、とりあえずは縁側でしゃべり続けるしかないという、さつき仰った古典的な人文学の方法を彼が受け継いでいるからだと思っています。

そういう意味で、ジャーナリストの残した仕事は玉石混交なので、「玉」については大学の現場でも伝えて学生に読んで欲しい、特に食の研究ではまだまだジャーナリストの優れた「研究」が私たちを導いているところもあるので、それはきつちりと伝えていきたいと思っています。とても示唆深いところをありがとうございました。

郡司

ラーゲリやそこでの体験についても、レーヴィーと石原吉郎、死後に石原を徹底的に批判した内村剛介とでは、認識が異なります。それを類型化しても意味がない。例えば作田の『恥の文化再考』の「はにかみながら日本人は事大主義や権威主義にたいして、無為の立場から消極的に抵抗してきた。その伝統は未来につながるものとして再評価に値するだろう」との最後の一節は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』を念頭において議論を進めたためにはまった陥穽だと思っています。作田は、日本の伝統とか文化とかではなく、あくまで太宰個人の、創作によって純化された羞恥の考察をおして、そこに普遍的な価値というか、未来への可能性を見出すことができたと考えています。個別具体的な「小さな物語」にこだわると、私の師匠である大濱徹也先生は書いたものをおして教えてくれました。先生は個別が普遍を規定するとも言っていて、私にも

そういう思いがある。

それと、石原は、ジェノサイドの恐ろしさは一人一人の死がないことだと書いている。だから数的なデータを挙げるのは、一つの方法としてはやっているけれど、すぐくもどかしい。この意味でも、やはり個別具体的な事例にこだわりたい、と思っています。

質問者 4（佐藤貴史・北海学園大学人文学部）・藤原先生に質問ですが、今の人文学は、何かに対抗する契機を前面に出さないといけないという状況が、不幸だと思いますが、あると思います。例えば今日の発表でも、暴力とか災害とか食権力とか、その最たるものだと思いますが、それらに対峙せざるをえない状況がある。これは問いの立て方の問題かもしれませんが、ある種、人文学が非常に政治化しているという言い方もできると思うのです。今、大学の中にいる人間は政治化せざるを得ない状況がたくさんあります。それと同時に人文学が政治化していくということ、果たして人文学はそういうものだったのかとも私は思うのです。ちょっと大きな話ですけども、先生はどう思われますか。

藤原・私も日々頭を悩ませているテーマでもあるので、率直に語れたらと思います。さっきの縁側の話と同じように、議論を続けるべきテーマだと思います。一つは、私もいろいろな社会運動に携わっていて、それは一人の市民として、たまたまこういう知識をもって今の状態がおかしいなと思っていますので関わっており、人文学者として、あるいは歴史学者として関わることはできるだ

けないでおこうと思っています。

その理由は、人文学の政治化と仰ったように、まさに人文学そのものが存在意義を問われているときに、ファイティングポーズで物事を語らなくてはいけないのはその通りですが、そのことで私たちが持っている言語を野蛮化してしまう、粗暴にしまうことにならないかということを、常日頃考えています。そういう意味で、一旦自分の中では別人格として関わるようにしています。

ただ、それでも人文学が政治化しているということは、エラスムスの時代からそうだったのではないかと一方で思っていて、エラスムスも当時の宗教的な状況の中で、言葉を発することを選択していたと思うのです。そういう意味で、政治化せざるを得ない状況に無頓着であってはならないと思います。

歴史学もご存知のとおり博物館、歴史学の本、そして論文も含めてですが、圧倒的に政治化が進んでいて、プーチンの2021年7月の論文にもありましたように、歴史学そのものが政治を規定している、歴史学そのものが政治の中にどんどん組み入れられていて、政治も、先ほどのアフリカの事例の悪用だと私は思うのですけれども、本来にある一部の、少数の人のために歴史が書き換えられることが、ごく平然と日本ではなされるようになってきています。

そんな中で、私の学問は政治とは関係ないと言って言葉を選んでいると、逆にしゅーっとういうところに回収される恐れがあるものですから、せめて敏感でなくてはならないと、残念ながら私たちは思っています。そういうわけで、人文学の政治化というよりは、人文学の政治化が強

制されている中で、人文学はどうあるべきかという問いを立て続けていかなければ、私たちは成り立たないと思います。

同時に、人文学とはユーモアと言いますが、時代状況が政治化している中で、つい光か闇か、プラスかマイナスかに陥りがちになりますが、人文学の場所ではできる限り、一かゼロかという二進法の世界ではないところで言語を紡いでいくことを、そういう場を守っていきたいと思っています。そのように往復しながら、今仰っていただいたような悩みを抱えています。答えになっていませんけれども、申し訳ありません。

司会…ありがとうございます。小松さんと郡司さんから一言いただければと思います。

郡司…戦時体制の人を「資源」とみなす、非人間的な人間観は現在の大学教育の原点ではないかという思いがあつて、やはり人を「材」や「資源」とみなすことに、私は抵抗を感じます。つまり、大学教育について、もう少し人文学として発言するべきなのではないか、と個人的には思います。それで、一つ申し上げたいのは、「健康で文化的な」という憲法第25条の生存権規定、私はワイマール憲法の「人間に値する生存」の方が良いと思っていますが、例えばドイツ語のクルトゥールは軍国主義と矛盾しないけれども、漢籍の、中国古典の文化は「文治教化」といつて刑罰や威力を用いないで人民を教化するというのが語義です。そこには、戦後間もない時期ですから、平和への願いが込められていたと思います。日本国憲法制定の際にこの文言を入れたのは森戸辰男

で、のちに広島大学の学長になり、中教審の会長として第三の教育改革に取り組んだ人です。そこで、人間形成の問題を考えた。彼は少なくとも教育を通して平和な国家を構築しようとした。

さっきの極限状況の話に戻ると、私個人の話になりますが、自分が弱いという自己認識があればできることはあって、それはできる限り極限状況をつくらないこと。私は近代史が専門なので、なおさら政治的なことにはかかわらないようにしてきましたが、安保法制が議論されていたときに初めて反対の署名をした。そういう意味での自己認識を歴史から得るということはあると思います。答えになっていません。申し訳ありません。

小松…私は自分の研究が、何も知らないところに飛び込んで、そこから見えるものは何なのかを考えることの連続できました。それが世界の中でどのような意味があるかも最初は全く考えないで、その世界にどっぷり浸かるところから始まっているのですけれども、それを大学で教えるようになって、私が見たことが、目の前にいる学生たちにどのような意味を持つのか、現代社会へのメッセージとしてどのような意味を持ちうるのか、と考えるようになりました。でも、考えてみるとメッセージというのはそもそも政治そのものの訳で、何かを伝えることには政治性が伴うと考えるのであれば、政治を伴わない教育、もしくは研究はあり得ないのではないかとというのが、最近考えているところです。政治という言葉はすぐ敬遠してきたものだし、自分はそのに関わらないのが好みだと思ってもきましたけれども、教員になった以上それは許されない。とすると、伝えるべきメッセージは何なのかを精査するよう心掛けています。

質問者5…私は大学の人間ではなく一般の人間で、藤原先生の『ナチスのキッチン』を読ませていた

だいて、今日は非常に楽しみに来ました。人文学の政治化という話題でしたが、どうも定義が曖昧で、いろいろな方の「政治化」という話を聞いていると、定義をきちんと議論すべきではないかなど。政治というところで敏感になり過ぎるのはいかがなものかなと思います。

と申し上げますのは、私は幸いにも民間の企業にしながら、環境経済学の植田和弘先生のお話を聞いて、植田和弘先生はやはりサステナブルディベロップメントというのは、開発と訳してしまったからダメなんだと仰いました。人間どうやって拘束を排除して自由になっていくかと解釈すべきだよというお話を聞いたときに、山際先生にオランウータンとゴリラ、人類とチンパンジーの話について「山際先生のオランウータンの話はすごいですね」と言ったらこっぴどく怒られて、「オランウータンとゴリラは、1400万年前と700万年前の違いがあるんだぞ」と言われました。ただそんな中でも父親の存在、家族の作り方、なぜオランウータンからゴリラになり、ゴリラから人類が引き継いだものと、それからチンパンジーがなぜ戦略的に引き継がなかったのかということ、これよく考えなきゃいけないよね、というお話を聞いたりしています。あと最近、近江先生のコミュニケーション論を聞いて、非常に京都大学の先生は外に對して政治的というのか、どのような未来を一緒に見ていきたいかという発信力を感じます。それで、質問というよりは、藤原先生がどうお考えなのか、私は北海学園大学が新人文科学のフロンティアとして、学園を巻き込んでどういう動き方をすればいいかをお聞きしたいと思います。私は民間の人間でありながら

工学部の非常勤で学生さんたちを見ると、非常に素直でいい学生さんたちですし、先生がたもいい先生たちなので、どうやって全学を巻き込んで、ゆるい関係をどうしていったらいいのか、ちよつと曖昧なのですけれども、そういうご意見をお聞かせいただければと思います。

藤原

大学にいとついで、大学だけで学問が担われていると勘違いしがちですが、学問は大学の外でこそ花開くものだと思いますから、そういう意味で今仰つていただいたことは、自分の中でも思い当たることが多かったです。巻き込んでいくということで具体的な例を一つお話します。

確かに、できるだけいろいろな人を巻き込んで大学の中で閉じこもらない学問を目指したいというのは私の心にもあつて、友人たちと今やっているのが「あるきはじめる大学」というプロジェクトです。これは夜に大学をこつそり開いて、大学に勤めていない人も一緒に来てもらつて、この前はウクライナの話、その前は遺伝子組み換えの話と、今の大きなトピックについて、来た人の背景関係なく、ドンパチで議論しようというのを、6〜7回くらいやってきました。それはどうしてかという、一つはこんなところで話すことではないかもしれないですが、ちよつと京都大学の執行部（もつといえ、国の大学行政）に失望してしまつて、一連の動きの中で本当にトッブダウンが激し過ぎて、じゃあ、京都大学の教員である私は何ができるだろうと思つたら、じゃあオルタナティブ大学を作ろうと、夜間大学を友人たちとやりました。

もちろんそれだけで、仰つたような運動とか巻き込むとかまでは行つていないかもしれませんが、面白いのは、大学の教員はつい大学の中や学会でしか通じない言葉を使いがちなのですね。

それを全部批判してくれるので、「ああ、今はダメだったんだ」。例えばアイデンティティとかいうのは、絶対ダメなので、それを一般的な言葉に置き換える訓練ですね。つまり、多くの人が、その言葉を通じてものを考えやすくなるような言葉を一緒に探るような大学、オルタナティブ大学風のものでできているものですから、そういうのをやりながら、企業にお勤めだった方や、お勤めされている方も含めて一緒にやっていきたいと思っています。そして当然、大学の主人公は教授ではなく学生であり、あるいは事務の方が一緒にいるからようやく大学が成り立っているのです。そういう方たちと一緒に大学を作り直していけたらな、と夢想しているところでございます。

司会

…そろそろお時間ですので、シンポジウムはここでおしまいとさせていただきます。皆さんには、それぞれの場所できび対話を続けていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございます。